

サイコ
ダイバー① 魔獣狩り (淫楽編) 夢枕 獭
祥伝社 (新書) (2/10刊・690円)



サングラスをかけ、コートを着た著者の写真でも分かるように、出版社側の意向は、これはもうメジャーなバイオレンスノヴェルだろう(わざとらしい写真ですが、ミステリアクション小説ではよくやる手です)。

出てくる登場人物は、全員が恐ろしく強い。拳法の達人で隆々たる筋肉の持主、文成仙吉。同じくやたら強いが、超美少年の美空。やはり、やたら強い老人狼翁。女性はというと、男の精を吸いつくす妖艶な美女蓮王母(これは敵方)。味方の女の子はかわいけれど、ちょっと印象に乏しい——と、この辺り著者の別のシリーズである、キマイラと基本的に同じだ。本シリーズとの大きな違いは、全体を通してのエロチシズムぐらいか。あ、忘

れていた、主人公のサイコダイバー九門鳳介がいる。ただ、本巻では、まだ主人公らしい活躍はしていない(この九門、作者の分身ではないか、という声あり)。

夢枕獭のキャラクターは皆天才型である。ダメ人間が極限状態に迫いつめられ、突然変身するというカタルシスはない。家族を奪われ、怒り狂ったあげく復讐を誓うという、寿行風シチュエーションもない。同じ、復讐でも、自分より強いものに勝つための復讐なのだ。このカラッとした陽性のキャラクターが、魅力の中心だろう。味方も敵も異常な人物の集まりで、どちらが正義で悪なのか、割切れない設定だから、あまりどろどろとした感情の起伏は似合わないはずである。

物語の時代は、よく分からない。やや近未来に属するのだろうか。まず、山中で文成が、異様な光景に出会うシーンからはじまる。それは、乱交と人身御供を交えた、ある種の宗教儀式なのだった……サイコダイバーとは、人間の心の中に潜航し、その精神の奥底に潜むトラウマや記憶を探り出す、プロフェッショナルの名である。フリーのサイコダイバーである九門は、ある日二組の依頼主と出会う。一人は僧侶の美空、もう一人は、謎の黒御所が率いる宗教団体の手下だった。彼らは、空海の即身仏(ミイラ)をめぐる対立している。九門は、ミイラを奪う際に倒れた、男の心の中へと潜っていく——はたして、ミイラをめぐる謎とは何か。宗教団体の正体は何だ

ったのか——残念ながら、その解明に至る前に、本書は終わってしまう。全部で何巻のシリーズになるのか、ようやくプロローグが始まったぐらいで、まだまだ続きそうだ。

夢枕獭と、大藪春彦や西村寿行との違いは、細部の相違は別にして、やはりSFにあ。別に、こういう類の小説で、SFが分っている必要性など全くない。ないけれど、無神経にSFの小道具を使われるよりは、ツボを心得えて応用してもらった方が、効果も上ろうというものだ。サイコダイバーは、それ自体、小松左京「ゴルディアスの結び目」に代表される設定と同じだが、アクション小説との組み合わせを違和感なくまとめるのは、かなり難しいはずである。夢枕獭だから考えられたのだろうか。そのうち、トラウマとの拳法アクションシーンなんか、見られるんじゃないか。

問題点があるとするとするならば、まず主人公が一体誰なのか、よく分からないこと。章が変わる度に、感情移入の対象も変わっていくのは、やや疲れる。第二に、いつまでたっても終わらないんじゃないか、しかもヘタに終ると尻切れになってしまうんじゃないか、という懸念が生じること(ストーリーが読み切りになっっていないのも、良し悪しです)。しかし、作者自身のきまり文句、この本は絶対おもしろい、という自信に違わない作品ではある。